

夫の部下に招かれて、人妻は接待の夜に揺れる

夫の部下を家に招いた接待の夜、人妻が揺れる

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

静寂だけが支配する広間。壁に映る明かりがゆらめき、奥深くへ消えていくような、あるいは視界が霞んだかのような錯覚に襲われる。それは単なる照明のせいではない。窓の外から差し込む薄明かりが、室内に浮かぶ二人の影を引き伸ばしながら、何かが破れ出る瞬間の余韻を空間いっぱいに漂わせているからだ。

涼はソファに腰を下ろしていた。手にはグラスが握られ指先だけは微かに震えるように見える。彼が招いた客、夫の部下である男は、まだその存在を意識した様子もなく、あるいはあえて意識しないふりをしているかのようだった。しかし涼の視線はその男よりも、むしろ自分が抱えている熱気に吸い寄せられるかのようだ。

「どうやら……今夜は長引きそうだね」

涼の声は普段より低く、少し滲んでいる。喉元に溜まった唾を飲み込んだ音まで、聴こえれば不気味で愛らしいほど澄んでいた。男は涼を見返して微笑み、まるでそれがただの社交辞令なのかと誤魔化すような仕草をした。だが涼が知っていたのは、その笑顔の裏にある、妻として妻でないもののへの渴望だ。

千聖はテーブルの上で静かに佇む。彼女の美しさは、白昼の明るさでは隠れてしまうような、艶つぽさとどこか洗練された優しさを併せ持ったものであった。三十一歳という年齢が、彼女に与えた重厚な肉体的成熟感。それは若々しいばかりではなく、年月をかけて磨き上げられた潤いを含んだ肌のように見えた。

男が手を伸ばしてグラスを注ぐと、液体の冷たさが指先を伝う。千聖もまた、夫の不在を感じ取って、あるいはそれを利用して、この異空間へと身を任せる準備を整えていた。彼女の視線は涼へと戻り、そしてそこには抑圧されつつも膨らむ期待感が宿る。

「涼……」

彼の名を呼ぶ声が、部屋中に響く。その声には、普段の家庭での何気ない会話とは違う、少しだけ甘くて危険な色気が混じっていた。涼が女房を見つめ直すと、千聖の唇から滲み出るような紅さが、より一層際立っているように思えた。

男が再び口を開き、自慢話のような言葉を垂れ流す。涼としては、そんな些細なことを気に留める暇などなかった。彼の心臓は、ゆっくりとした脈拍を刻みながら、やがて

加速していく予感に満ちていた。これは単なる接待ではない。二人の関係が、いつもの平穏な水面下で蠢き始めた証拠だった。

千聖はゆつくりと立ち上がり、男の隣へ歩を進めた。彼女はソファの端っこを優雅に占領し、涼との距離を詰めていく。その姿勢は、まるで無意識のうちに二人の世界を作ろうとするかのように自然だった。涼の手元に残ったグラスの中の氷が、音を立てて碎ける。それは、静寂が破られる前の最後の合図に違いない。

「さて、この辺りの空気、どう感じます？」

男の声が響き、千聖もまた視線を上げて応じた。しかし彼女の目は、夫にも涼の顔にも焦点を合わせず、どこか虚空へと吸い込まれているようだった。あるいは、その視線が二人の間に張り巡らされた糸を捉え、ぎゅっと握りしめようとしているかのようだ。

涼はその情景を見つめ、自身の身体感覚が麻痺しかけてくるのを察知した。胸の中で鼓動が高まり、背筋を伝う微かな熱気が、皮膚の表面に浮上してきているのが分かった。それがただの体温ではなく、何かが溢れ出しそうになるほどの潤いだ。

夜更けの部屋には、重く湿ったような空気が漂っていた。壁紙の質感や、絨毯の厚みさえ、それまでとは異なる感触で肌に触れる。三人で囲まれた空間なのに、どこか二人だけの世界線が交錯しているように見えた。男はあくまで導火線の役割を果たすだけで、本質的な変化はこの家、この夫婦の間で行われるはずだと涼は直感していた。

千聖の呼吸が、わずかに荒れた。彼女は涼の頬を、指先でそっと撫でた。冷たい指先と、唇の上から伝わる温もりとの対比が、感覚を研ぎ澄まさせていく。それは、言葉では説明できない、甘酸っぱい予感が脳裏を過るほどだった。

「……寂しいね」

彼女が呟いたその言葉の意味は、夫不在の寂しさなのか、それともこれから始まる未知の体験への渴望なのか。涼も千聖自身も、はつきりと答えを出す間もなく、再び男の言葉に耳を傾けることにした。だが、涼の視界はまだ揺らぎ続け、この夜の只中へと引きずり込んでいく準備ができていることを示唆していた。

最も濃密な時間は、まだ訪れていなかった。その前段階として、二人の関係性が歪められ、張り詰めた弦が弾かれる寸前。涼はグラスを持ち直し、次の瞬間へ踏み出す覚悟

を決める。千聖はその光景を窺い、静まり返った広間で、只今の自分たちが置かれている特殊な状況を楽しみにしている。すべては、今夜の彼らの関係性を覆すような、あの最初の触れ合いへと向かうための、ゆつくりとした呼吸のようだった。



——ここから先は製品版でお楽しみください——